大成古墳第３次発掘調査報告書

平成７年３月

安来市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	おおなりこふんだい３じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	大成古墳第３次発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	渡辺貞幸・金山尚志・櫛山範一・藤永照隆
編集機関	安来市教育委員会
所在地	〒692 島根県安来市安来町874-20 TEL0854－22－2149
発行年月日	西暦 １９９５年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
大成古墳 (おおなりこふん)	島根県(しまねけん) 安来市(やすぎし) 荒島町(あらしまちょう)	32206	－	35度 25分 40秒	133度 12分 30秒	19950227～ 19950310	25	学術調査 (国庫補助事業)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大成古墳	古墳	古墳時代	古墳に伴う溝		墳丘の南側と西側で墳端と思われる遺構を検出した。

序

この報告書は、平成６年度に安来市教育委員会が国と県の補助を得て実施した安来市荒島町に所在する大成古墳の発掘調査報告書であります。

安来市の西方に位置する荒島地区は、造山古墳群など山陰を代表する著名な大型墳墓が集中するところとして広く知られています。

このあたり一帯の調査研究に関しては、昭和40年に造山３号墳の発掘調査が行われたのをはじめとして、仲仙寺宮山墳墓群などの調査が行われてきました。

その後、平成４年度には荒島地区の古墳群の一部である造山古墳群を“古代出雲王陵の丘”として整備し、皆さんにご覧いただけるようにしてまいりました。さらに同地区一帯の古墳群の歴史的意義を明らかにする目的で清水山古墳群の調査なども継続し、一応の成果をおさめてきました。

一方、大成古墳については、平成３年に東京国立博物館考古課長（当時）の本村豪章氏による再調査が行われ、竪穴式石室や排水溝など諸構造が明らかになるなどの多大な成果があがっております。

今回の調査は島根大学渡辺貞幸教授の協力のもとに、これまでの調査で明確にしえなかった南側・西側裾を確認する目的で実施したものであります。

その結果、古墳時代前期の方墳としては全国的でも最大の規模を誇るものである可能性が浮かびあがりました。

大成古墳については現在未指定の状態でありますが、今後は大成古墳を含め荒島地区に集中する古墳の保存措置を図るよう各方面に働きかけていく必要があると考えております。

今回の調査成果をおさめましたこの報告書が大成古墳の歴史的意義を解明する一助になれば幸いです。

最後に、調査に際しまして、島根大学考古学研究室、土地を所有されている方々をはじめ地元の皆様、関係諸機関に多大なご協力をいただきました。ここに深く感謝いたしますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成７年３月

安来市教育委員会

教育長　　市　川　博　史

例　　言

1　本書は、１９９４（平成６）年度に安来市教育委員会が国・県の補助金をうけて実施した、荒島古墳群発掘調査事業（大成古墳）の発掘調査報告書である。

2　今回報告する大成古墳の地籍は安来市荒島町字大成２９４２番地・２９４３番地である。

3　調査は島根大学法文学部考古学研究室の協力を得て行った。

4　発掘調査組織

調査主体　安来市教育委員会

調査指導　渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）・門脇等玄（安来市文化財保護委員）
野津弘雄（同）・東森市良（同）・天野昌世（同）
本村豪章（前東京国立博物館課長）・西田建彦（文化庁記念物課文化財調査官）
川原和人（島根県教育委員会文化課）・今岡一三（同）

事務局　市川博史（安来市教育委員会教育長）・大森栄（安来市教育委員会文化振興室長）
川井章弘（同室長主査）・三宅博士（同文化係長）・金山尚志（同文化係）

調査員　金山尚志（安来市教育委員会文化振興室文化係）

調査参加者　園　俊朗（島根大学研究生）・沖野拓矢（島根大学学生）・櫛山範一（同）
藤永照隆（同）・上原香里（同）・大野聰子（同）・片倉愛美（同）・徳永隆（同）
平田朋子（同）・細田美樹（同）・石田陽子（同）・神柱靖彦（同）・竹内奈美（同）
渡辺桂子（同）・野崎裕臣（島根大学ＯＢ）・松本誠・松本勝利
松本三喜子・松本きよえ・水野孝・田川栄重・田中スミエ・金山喜次夫

調査協力　島根大学・古谷毅・西尾克己

4　調査に際しては、島根大学、土地を所有されている勝部覚太郎氏・松本直樹氏・松本公義氏・松本勝利氏、調査者の宿泊を受けいれていただいた仲仙寺住職小村海満氏をはじめ関係諸機関に多大な協力をいただいた。

5　本書の挿図の方位は、第２・３・８図が直角平面座標の方眼北を、それ以外の方位は調査時の磁北を示す。

6　本調査で出土した遺物は安来市教育委員会で保管している。

7　本書で使用した墳丘測量図は平成３年に東京国立博物館が、周辺測量図は平成元年に安来市教育委員会が作成した図面の位置図を一部修正したものである。

8　挿図中の土層の記載は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』日本色研事業㈱（１９８９）によった。

9　本書の編集は渡辺・金山が行った。執筆は渡辺、金山、櫛山、藤永が行い文責は文末、目次に示した。

大成古墳第３次発掘調査報告書目次

1　調査に至る経緯 …… （金山） 1
2　位置と歴史的環境 …… （金山） 1
3　既往の調査の概要 …… （渡辺） 6
4　古墳の現状と調査の経過 …… （渡辺） 9
5　発掘調査の成果
Ｗ－１トレンチ …… （藤永） 12
Ｗ－２トレンチ …… （藤永） 12
Ｓ　トレンチ …… （櫛山・渡辺） 14
6　まとめと若干の考察 …… （渡辺） 19

挿　図　目　次

第１図　大成古墳周辺主要遺跡分布図 …… 2
第２図　周辺地形測量図 …… ３～４
第３図　発掘区配置図 …… 11
第４図　Ｗ－１トレンチ実測図 …… 13
第５図　Ｗ－２トレンチ実測図 …… 15
第６図　Ｓトレンチ実測図 …… 17～18
第７図　南側墳端部断面復元想像図 …… 19
第８図　墳端の推定ライン …… 20
第９図　墳丘断面見通し図 …… 21

写 真 図 版 目 次

図版１上　大成古墳遠景 …… 25
中　西側墳裾調査前 …… 25
下　西側墳裾トレンチ完掘状況 …… 25
図版２上　Ｗ－１トレンチ完掘状況 …… 26
下　Ｗ－１トレンチ墳端検出状況 …… 26
図版３上　Ｗ－２トレンチ完掘状況 …… 27

下　W－２トレンチ墳端検出状況 …… 27
図版４上　南側墳裾調査前 …… 28
中　Ｓトレンチ完掘状況 …… 28
下　Ｓトレンチ北端部 …… 28
図版５上　Ｓトレンチ崩落葺石検出状況 …… 29
下　Ｓトレンチ区画溝検出状況 …… 29
図版６上　Ｓトレンチ断面 …… 30
中　Ｓトレンチ区画溝底部 …… 30
下　Ｓトレンチ断面 …… 30
図版７上　Ｓトレンチ区画溝底部 …… 31
中　出土遺物（表） …… 31
下　出土遺物（裏） …… 31

1　調査に至る経緯

大成古墳の所在する荒島地区は、弥生時代から古墳時代にかけて全国的に見て非常に特徴的なあり方をしている地域である。安来市ではその特性を生かし、平成２年から２ヵ年で造山２号墳・４号墳の調査を行い、その所属時期を明らかにしたうえで平成４年度に造山古墳群を“古代出雲王陵の丘”として整備を行った。これをきっかけに荒島一帯の墳墓群の意義を明らかにするために平成２年から継続的に調査を始めた。その後平成４年から２ヵ年をかけて清水山古墳の調査を行い、造山古墳群の西方の丘陵上に大型方墳が存在することを明らかした。

一方、大成古墳は明治44年に土地所有者により竪穴式石室と鏡・大刀などが発見された。その後、梅原末治氏により学会に発表されて以来、出雲の代表的な方墳として位置づけられてきた。しかし、古墳そのものの本格的調査がなされないまま近年に至った。そこで、発見以来80年ぶりに東京国立博物館考古学課長（当時）本村豪章氏の科学研究費により、島根大学渡辺貞幸教授を調査員として平成３年に２次にわたる再調査を行った。そして、第１次調査では主体部の確認と墳丘測量、第２次調査では排水溝の確認など多大の成果をあげた。しかし、なお墳丘の規模など課題を残しており再調査の必要があった。

こうした経緯から、安来市は今年度の荒島古墳群発掘調査事業として、島根大学の協力を得て、第３次大成古墳の再調査を実施することとなった。

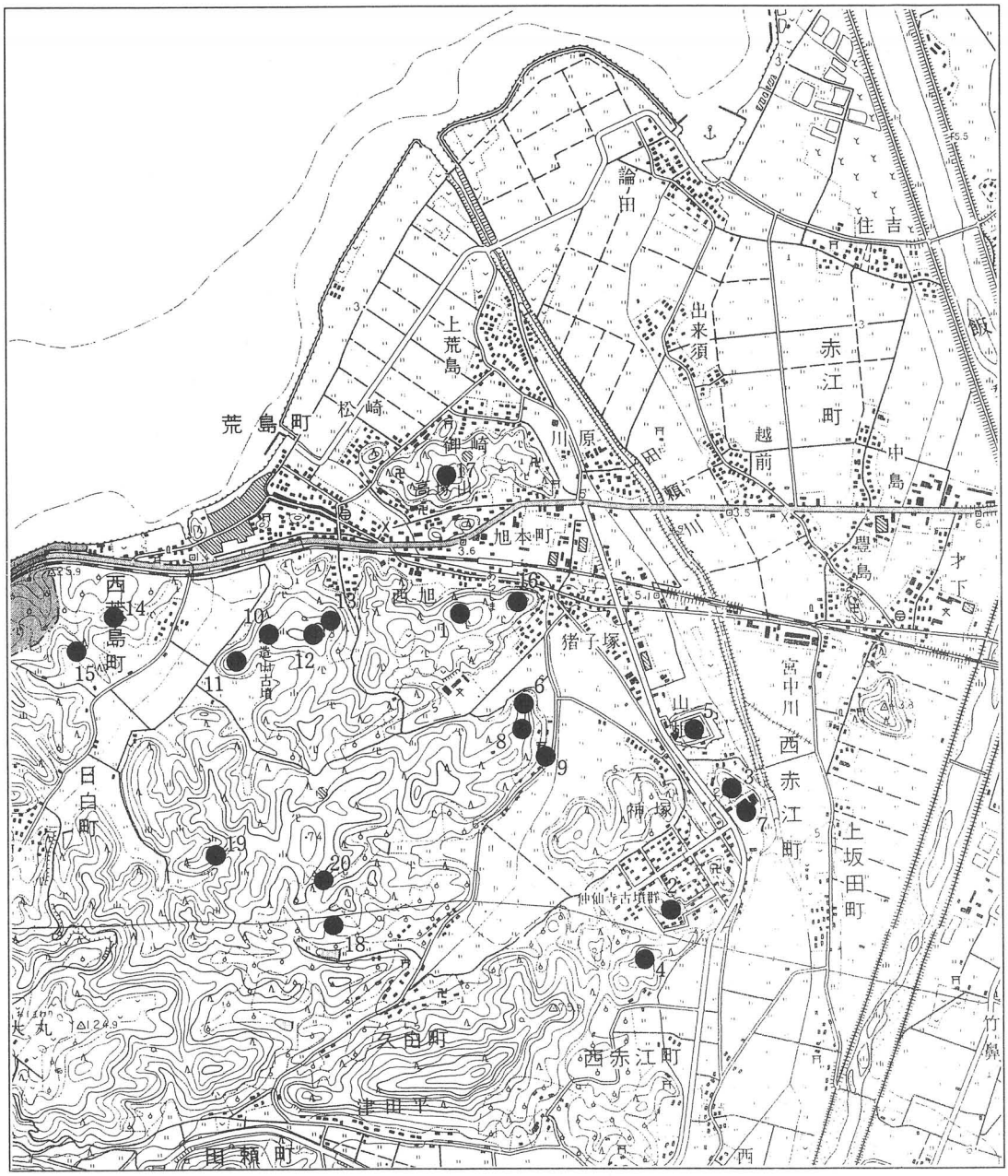
（金山尚志）

2　位置と歴史的環境

大成古墳①は、能義（安来）平野を東西に分断する飯梨川の西側、中海に面した東西にのびる標高４０ｍの独立丘陵に位置する。立地はこの丘陵のほぼ中央北側にこぶ状に飛び出した部分にあたる。墳頂から中海はすぐ眼前に広がり、遠く島根半島や大根島を望むことができる。

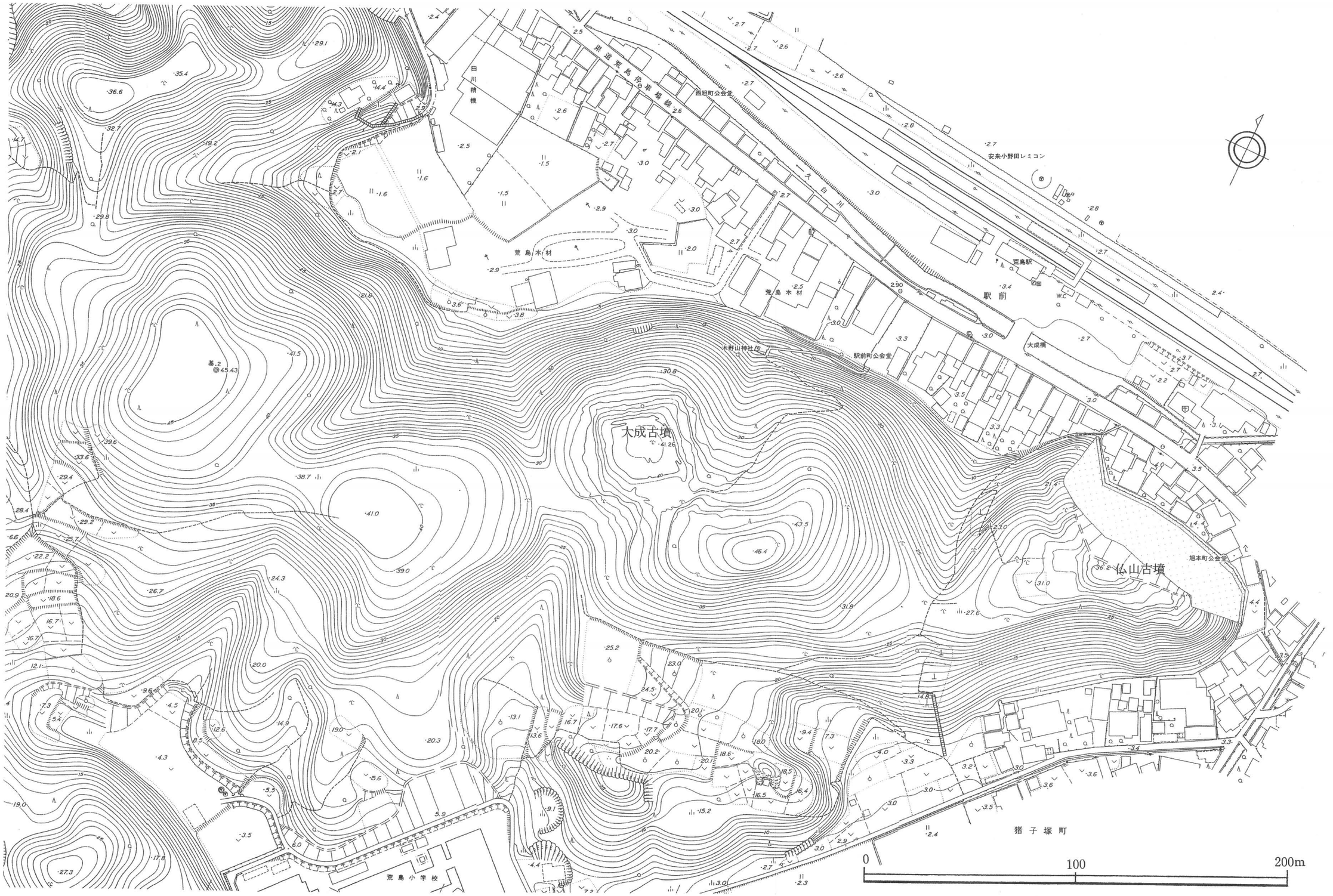
大成古墳が存在する荒島地域一帯は弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓をはじめとして、古墳時代の方墳・前方後方墳・石棺式石室、歴史時代の家形石製蔵骨器など、長期にわたって連綿と首長墓が存在する重要な地域である。

大成古墳の南約1.5kmの辺りは弥生時代の首長墓である四隅突出型墳丘墓が密集する地域である。史跡として整備された国指定史跡仲仙寺古墳群（８号墓・９号墓・10号墓）②、仲仙寺古墳群宮山支群（４号墓）③の他、下山墳墓④、既に消滅した安養寺墳墓群（１号墓・３号墓）⑤、そして県指定史跡塩津１号墳⑥がそれぞれ存在している。また、四隅突出型墳丘墓と隣接して古墳も造られ



第１図　大成古墳周辺主要遺跡分布図　　１：25000　揖屋・広瀬

１大成古墳	２仲仙寺古墳群	３宮山支群	４下山墳墓	５安養寺墳墓群
６塩津１号墳	７宮山１号墳	８塩津山１号墳	９塩津神社古墳	10造山 １号墳
11造山 ３号墳	12造山 ２号墳	13造山 ４号墳	14清水山１号墳	15塩田横穴群
16仏山 古墳	17高塚山古墳	18小久白遺跡	19中山遺跡	20若塚 古墳



第2図　周辺地形測量図（1：2000）

ている。出雲第２の規模（推定全長52m）をもつ前方後方墳－宮山１号墳⑦（古墳時代中期・消滅）は宮山支群に、特異な形態をした前期古墳－塩津山１号墳⑧や市指定文化財の石棺式石室－塩津神社古墳⑨（古墳時代後期）は塩津１号墳に隣接している。

大成古墳を含め西方から南方にかけては、古墳時代前期から後期初頭にかけての古墳が集中する地域である。まず西方１kmには国指定史跡である１号墳を中心とした造山古墳群がある。１号墳⑩は１辺40mの規模をもつ前期の大方墳である。２つの竪穴式石室を持ち仿製三角縁三神三獣鏡をはじめとする豊富な遺物が出土している。１号墳に続くと考えられる３号墳⑪も１辺40mの規模をもつ前期の方墳で、竪穴式石室から舶載斜縁二神二獣鏡などの遺物が出土している。造山２号墳⑫は50mを測る前方後方墳である。平成２年度から当教育委員会で調査を行い、古墳時代後期前葉の築造と判明した。同時に調査された４号墳⑬は２号墳と同時期であることが明らかとなった。現在造山古墳群は「古代出雲王陵の丘」として整備されている。

さらに西には清水山古墳群がある。１号墳⑭は平成４年度からを調査を行い、古墳時代中期に属する１辺42mの２段築成の方墳であることがわかった。また隣接して塩田横穴墓群⑮（古墳時代後期）がある。

大成古墳と同一丘陵東側に位置する仏山古墳⑯は、古墳時代後期のもので推定約５０mを測る前方後方墳である。獅噛環頭大刀などが出土している。

大成古墳の北方には石棺式石室をもつ高塚山古墳⑰がある。

大成古墳から南西約１kmは奈良時代の墳墓－須恵器の蔵骨器を出土した小久白遺跡⑱が、北西に家形石製の火葬骨を有する蔵骨器が出土した中山遺跡⑲があり、この時代においてもかなり地位の高い人がいたことは間違いないと思われる。また隣接して石棺式石室をもつ若塚古墳⑳（古墳時代後期）がある。

小さなまとまりごとに説明してきたが、大まかにいえば、四隅突出型墳丘墓（弥生時代）は南方に、巨大な墳丘を持つ古墳（古墳時代前期～後期）は大成古墳を含め西方から南方に、石棺式石室（古墳時代後期）は北方と南方に、横穴墓（古墳時代後期）は西方に、火葬墓（奈良時代～平安時代）は南西方向に分布することになる。

以上、大成古墳周辺遺跡の概略を記してきたが、弥生時代末期から奈良時代にかけておよそ５００年にも及ぶ間この地は政治的な意味においても重要な地として位置づけられていたものとみることができよう。

（金山尚志）

3　既往の調査の概要

(1)

大成古墳は、1911（明治44）年６月に土地所有者によって竪穴式石室が発見され、鏡その他の遺物が出土して世に知られるようになった。発見のいきさつは、後述の石倉暉栄氏による聞き書きでは大雨のあと蓋石の一つが折れて露出したといい、本村豪章氏の考証[1]でも石室陥没のためという。出土した副葬品類は、翌1912（大正元）年12月に東京帝室博物館（現、東京国立博物館ー以下、東博と略すー）が島根県から購入し、今日に至っている。東博に収蔵された資料は、三角縁神獣鏡１、土師器怨（小型丸底坩）３、土師器高坏（低脚坏）２、鉄製素環頭大刀１、鉄刀２、鉄剣２、鉄剣片一括、朱粉である[2]。なお、同年５月には野津左馬之助氏が現地調査をしているが、これについては後述する。

考古学界に大成古墳を初めて紹介したのは梅原末治氏で、1918年の『考古学雑誌』に、地元の石倉暉栄氏から寄せられた報告に基づいて古墳の概要を記している[3]。引用された石倉氏の報告は、この古墳を葺石をもつ方墳と明言し、規模については、歩測によったとして１辺20間（約36m）という数値を掲げている。石室はこの頃にはすでにほとんど埋まってしまっていたが、石倉氏はこれを南に開口する横穴式石室と考え、最南部にも石を積んだ壁があったという土地所有者の証言をあえて退けている。石室の大体の規模や石室断面形、石室底部中央の礫を組んだ排水施設についても言及されていて、これらはその後長い間、本古墳に関する唯一の基礎資料と見なされることになる。石倉氏の報告を紹介した上で、梅原氏は東博所収の出土品リストを載せている。しかしこれにはなぜか、同じ荒島丘陵にあって大成古墳の前年に発見されやはり東博に所蔵された仏山古墳（後期古墳）の出土品が交錯してしまうという重大なミスが犯された。しかし学史的に見てより注目すべきことは、この論文の中で氏が、大成古墳の三角縁神獣鏡に注目しつつ、古式の方墳の性格と時期について考察を加えている点であろう。

さて、野津左馬之助氏は1925（大正14）年刊行の『島根県史』において、この古墳についてふれている[4]。そして「墳丘周囲には埴輪円筒破片多く散乱せり」という注目すべき所見を付け加えている。石室については、発見の翌年における氏自身の実査に基づいて、全長7.28m、高さ1.06m、幅0.76～1.17mと記しているが、先の梅原論文（に引用された石倉報告）に引きずられてか、南に開口する横穴式石室と見立てた表現をしている。しかし、「石室は開口後年々土砂流入して、今日に於ては内部測定困難」という記述があって、自身の調査結果に照らして石倉説には疑問を抱きつつも詳細を再検討できないことを残念がっているようにも受け取れる。出土品についての記載もやはり

梅原論文によっているので、ここでも仏山古墳の出土品が混淆してしまっている。

（2）

以上のようなやや混乱した大成古墳像を正したのは山本清氏である。1951（昭和26）年、氏は出雲地方の方形墳と前方後方墳について総括的に論じたが、この中で大成古墳を取り上げ、これが竪穴式石室をもつ方墳であることを述べた。そして、東博における実査結果をもとに、梅原論文以来の紹介記事には仏山古墳出土品との交錯があることを初めて明らかにした[5]。こうして、大成古墳は竪穴式石室を有する前期の方墳であるという明確な位置づけ[6]が定着することになり、出雲の典型的大型前期古墳の一つとして知られるようになったのである。出土品についての山本氏の図と検討は、1970年の『安来市史』[7]で紹介されている。

また、出土品のうち特に三角縁神獣鏡と素環頭大刀に関してはいくつかの注目すべき検討がなされ、この種の遺物についての研究を前進させることになった[8]。

一方、古墳そのものについてはその後もほとんど検討されることがなかった。古墳の規模も、石倉氏の歩測の数値がメートル法に換算されただけで、そのまま各書に使用されていた。1970年代末に、前島己基氏は「列石の基底部で東西辺65m、南北辺44m」という新しい観察結果を報告している[9]が、この「列石」は、現在墳丘周辺に何ヵ所か見られる後世の石垣のことであろう。こうした中で、1980年代になって出雲考古学研究会が本古墳の測量図を初めて作成し公表したことは特筆される[10]。これによって、古墳の規模は現状で１辺およそ45mを測ることが明らかになった。

（3）

1991（平成３）年になって、80年ぶりに大成古墳に発掘の鍬が入れられることになった。東博考古課長（当時）の本村豪章氏は、かねてから既掘の竪穴式石室を再調査することによって新しい知見を得ようというプロジェクトを構想し、その調査対象候補の筆頭に大成古墳を挙げていたのだが、この研究課題に対して文部省の科学研究費補助金が交付されたのである。そこで、東博と島根大学考古学研究室とは協力して「大成古墳発掘調査団」（団長・本村豪章氏）を組織し、この年の３月と８月の２次にわたって発掘調査を実施することになった。この時の主な調査内容は次の諸点である。

①墳丘および周辺部の測量図の作成。

②竪穴式石室の一部の再調査・実測。

③石室内環境の自然科学的調査。

④石室掘り形（墓壙）の部分的調査。

⑤墳丘北側斜面における葺石と墳端の調査。

⑥墳丘南側における排水施設出口の調査。

⑦石室の石材・赤色顔料および出土品の自然科学的調査。

これらの具体的成果については概要報告[4]があり、また、正式報告書の刊行準備が東博で進められているので、ごく簡単に一部を記すにとどめたい。竪穴式石室については、その位置を確認し、石室全体の約２／３と推定される部分を発掘した。石室主軸はほぼ北西－南東方向にあって、梅原論文に付され各書に引用されている石室平面の略図がかなり誤ったものであることを明らかにした。石室基底部は礫床の上に粘土を用いたものである。石室掘り形（墓壙）は南東に開口する大土壙で、その方向に石室中軸床下から続く排水溝が走っていると予想された。墳丘南側の削平部北端付近のトレンチで、この排水溝の出口と考えられる遺溝を確認している。また、旧状を比較的よくとどめていると判断された墳丘北斜面で葺石と墳端を確認する目的でトレンチを入れたところ、ほぼ見かけの墳端付近を境にしてその上方に葺石がよく遺存していた。しかし、明確に墳端を示すような痕跡が見られなかったため、本来の墳端を確定するには至らなかった。

以上のように、1991年の２次にわたる発掘調査は、本古墳を再検討するための基礎資料を得る点で画期的なものであったが、石室についても墳丘についても調査はほんの一部にとどまっていて、なお多くの課題を残すものであった。

今回の調査はこれらの調査成果の上に立ち、特に古墳の墳端を確認することを目的として実施したものである。なお調査に当たっては、東博考古課のご好意で、1991年調査時における図面類の貸与を受けたことを付記する。

（渡辺貞幸）

---

(1) 本村豪章「古墳時代の基礎研究稿－資料篇（Ⅰ）－」『東京国立博物館紀要』16、1981。

(2) 前註（1）に同じ。

(3) 梅原末治「丹波国南桑田郡篠村の古墳」『考古学雑誌』９－１、1918。

(4) 野津左馬之助「島根県内の古墳」『島根県史』４、1925。

(5) 山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」『島根大学論集（人文科学）』１、1951。

(6) 山本清「遺跡の示す古代出雲の様相」『出雲国風土記の研究』、出雲大社、1953。

(7) 内田才「原始・古代」『安来市史』、1970。

(8) 樋口隆康「同型鏡の二三について」『古文化』１－２、1952。
森浩一「どうして鏡の銘文が消されるのか」『古代学研究』81、1976。
中原斉「会見町普段寺１号墳出土の三角縁神獣鏡」『鳥取埋文ニュース』19、1988。
町田章「環刀の系譜」『研究論集』Ⅲ、奈良国立文化財研究所、1976。
置田雅昭「中国　鉄素環頭大刀の把の構造」『古文化談叢』20（中）、1989。

(9) 前島己基「荒島丘陵の古墳」『さんいん古代史の周辺〈中〉』、山陰中央新報社、1979。初出は、1978年６月14日付『山陰中央新報』紙。

(10) 出雲考古学研究会『荒島墳墓群』、1985。

(11) 本村豪章ほか『既掘前期古墳資料の綜合的再検討』（平成３年度科学研究費補助金研究成果報告書）、1992。

4　古墳の現状と調査の経過

古墳の現状　第３図は、大成古墳発掘調査団による1991年の調査の概要報告に載せられた測量図に、今回発掘した調査区を書き込んだものである。図に見るように、大成古墳墳丘の各辺は東西南北の方向とはかなりのずれがあるが、便宜上、北北西側の比較的きれいな斜面をなしている辺を北辺と表現し、他の辺についてもこれに合わせて東・西・南の語を使用することとする。

まず墳丘北辺は、現在は檜の植林がなされているが、等高線にさほど大きな乱れが見られないので、旧状をある程度とどめているのではないかという印象を受ける。1991年に、植林の隙間を縫うように発掘区を設定して葺石と墳端を確認するための調査を行ったことは、すでに記した。

東斜面は今は雑木林となっているが、開墾によって著しく改変されている。段々畑の跡が残り、各段には石垣が作られている。この石垣はかなり崩落しているが、石垣の背後には地山が露出しているので、これらの段が、後世に古墳の墳丘を大きく破壊することによって作られたものであることは確実である。

墳丘の西斜面は特にその北側が急傾斜になっているが、下はなだらかな平坦地形になる。このなだらかな部分はかつて畑だった所（現在は荒れ地）で、畑を造成する時に墳丘をかなり削り込んでいると考えられ、その境、つまり現状の墳裾の部分には石垣が築かれている。但し、石は北半ではほとんど崩落している。等高線の流れからすると、北方ほど墳丘の破壊は大きかったことが分かる。

南斜面は今は竹林だが、幅20m余りにわたって大きく墳丘を削り畑としていた平坦地があって、そのカット面にはやはり石垣が作られている。これら現在墳丘の各所に見られる石垣は、墳丘を削った時に出た葺石を再利用したもので、すべて後世の、おそらくは近代以降のものであろう。この畑だった部分のさらに南は、南東に向かって高くなり岩田山と呼ばれる丘陵へと続き、南西側は逆に谷になって落ち込んでいる。南斜面西寄りの部分は、墳頂の土が流出したかのような緩斜面をなしている。

なお、現在墳丘上は全面に檜の苗木が植えられている。

発掘区の設定と調査の経過　発掘調査は1995年３月１日から10日まで実施した。短期間でもあ

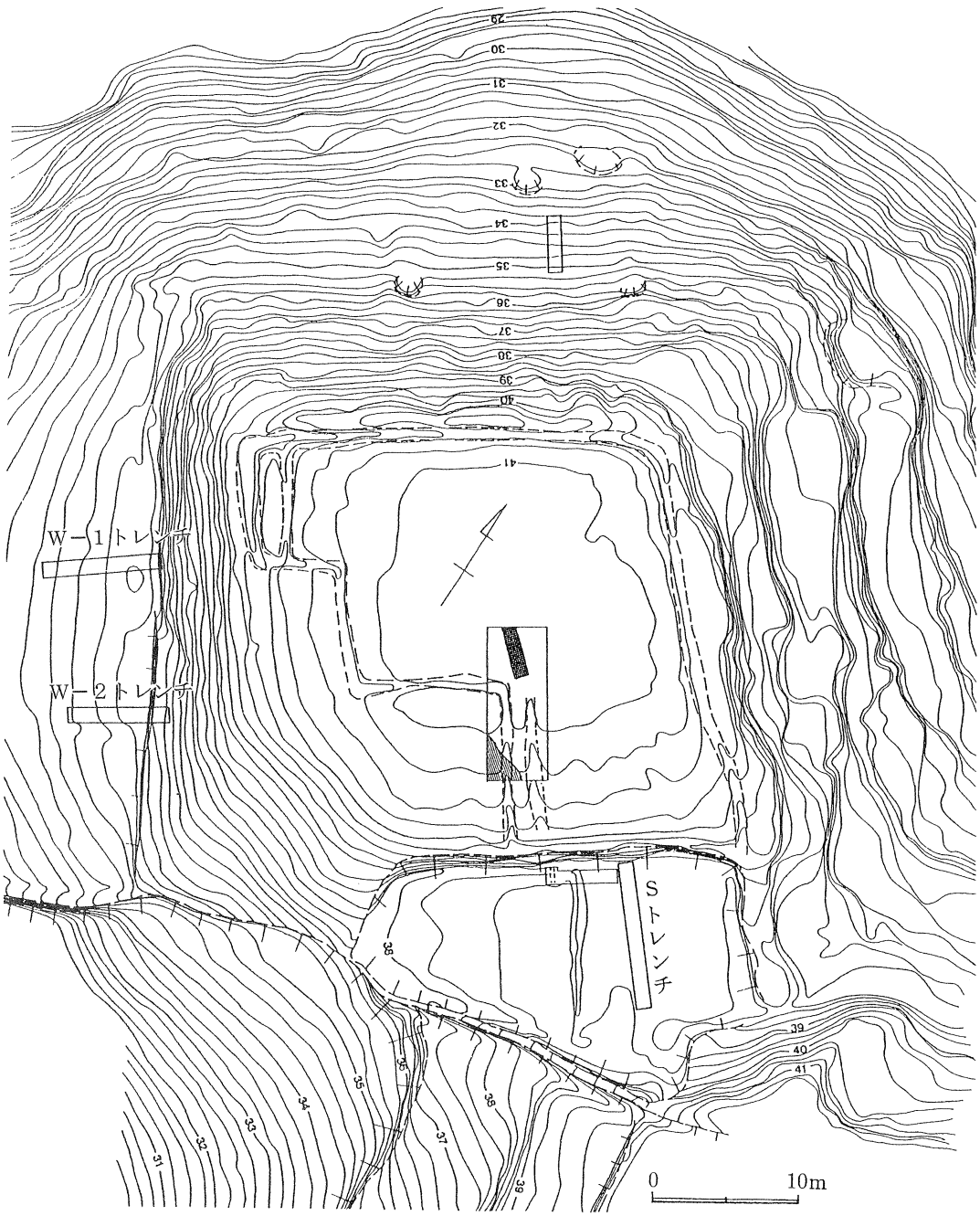
り、調査の目標は、1991年の調査の際に設置した測量杭の再整備と古墳の墳端の確認、の２点に絞った。前者については、旧来の杭を確認した上で、今後の調査に備えて新たにプラスチック杭を４本埋置した。後者については、墳丘の各斜面が先に見たような状況なので、発掘区をどこに設定するかがまず問題であった。北辺はすでに４年前に１ヵ所ではあるが調査しており、しかも、今はかなり成長した檜が密に生えていて、発掘区の設定そのものが困難であったので、見送ることにした。東辺は前述のように、開墾によってほぼ完全に破壊されている。従って、今回の調査対象は墳丘の西側と南側ということになった。

西側では、現状の見かけの墳裾線（石垣のあるライン）のほぼ中央部から外（西）側つまりかつて畑だった平坦地にかけて、長さ８ｍのトレンチを設定した（Ｗ－１トレンチ）。その結果、トレンチの東端、即ち現状の墳丘ののり面ではすぐに地山が出てきて、やはり本来の墳丘斜面は削られてしまっていることが判明した。そこで平坦地となっている側を精査したところ、現状の墳裾部から西に５ｍ弱行った辺りで、表土（耕作土）直下の地山が１段下がって段ができていることが分った。これは耕作土下で辛うじて残った墳端の痕跡ではないかと推測されたので、約９ｍ南にほぼ平行する長さ７ｍの新しいトレンチ（Ｗ－２トレンチ）を設定して、その段の続きを探索することにした。するとここでも、石垣の西およそ3.5ｍの所で墳端痕跡らしい段差のあることが確認できた。二つのトレンチで検出できた地山の段を結んだ線は、現在の見かけの墳裾線より北側が西にかなり振れていて、古墳西辺は北ほど破壊が大きかったという先に述べた予想とも合致し、また、その位置からして開墾によってできた段とは考えにくいので、これが古墳の本来の墳端であった可能性は高いと判断された。

墳丘南側も畑の造成で削られているが、さらにその南は小高い丘陵になっているので、古墳を造成した時にここで自然の丘陵を切断したのではないかと想像され、その切削加工痕が検出できるのではないかと期待された。しかし竹が密生しているため、長さ10ｍのトレンチ（Ｓトレンチ）を１ヵ所設定するにとどまった。Ｓトレンチは、排水溝の出口を検出した1991年のトレンチの東端に接する位置にある。調査の結果、現状で幅４ｍ強、深さ現地表から約1.5ｍの東西に走る断面逆台形の溝が検出され、古墳の南端を画する見事な施設の存在が明らかになった。

こうして、墳丘の西辺と南辺とで墳端に関わる遺構を確認し、所期の目標を達成して調査を終えることができた。

（渡辺貞幸）



第３図　発掘区配置図（ベースマップは『既掘前期古墳資料の綜合的再検討』による）

方位は座標系方眼北

5　発掘調査の成果

W－１トレンチ（第４図）

古墳の西側墳裾の状況を確認することを目的に、見かけの西側墳裾（石垣のあるのり面）より西方へ伸ばす形で設定した、長さ８ｍ、幅１ｍのトレンチである。

調査の結果、見かけの墳裾より５ｍ弱西方の位置に、現存高20cm程度、傾斜角約45°の地山（クサリ礫層）を削り出した立ち上がりが検出された。この立ち上がりの下端が本来の古墳墳端であると推定され、墳丘の西側は後世の大規模な削平によって大幅にその形を変えているものと判断された。この推定墳裾のレベルはトレンチのほぼ中央で標高34.68ｍである。トレンチ内では葺石らしき石は確認することはできず、推定墳裾線付近の地山面に５～10cm大の小さな石が若干見られたのみであった。また、墳裾と判断した立ち上がり部分に堆積している褐色粘質土層からも１～３cm大の小礫・石片がまばらに検出された。これらの礫の性格については明らかでないが、かつてあった葺石に関わるものかもしれない。

トレンチ東端に見られる南北方向の浅い溝は墳丘の削平時ないしその後に掘られたもので、本古墳と直接関連するものではない。（藤永照隆）

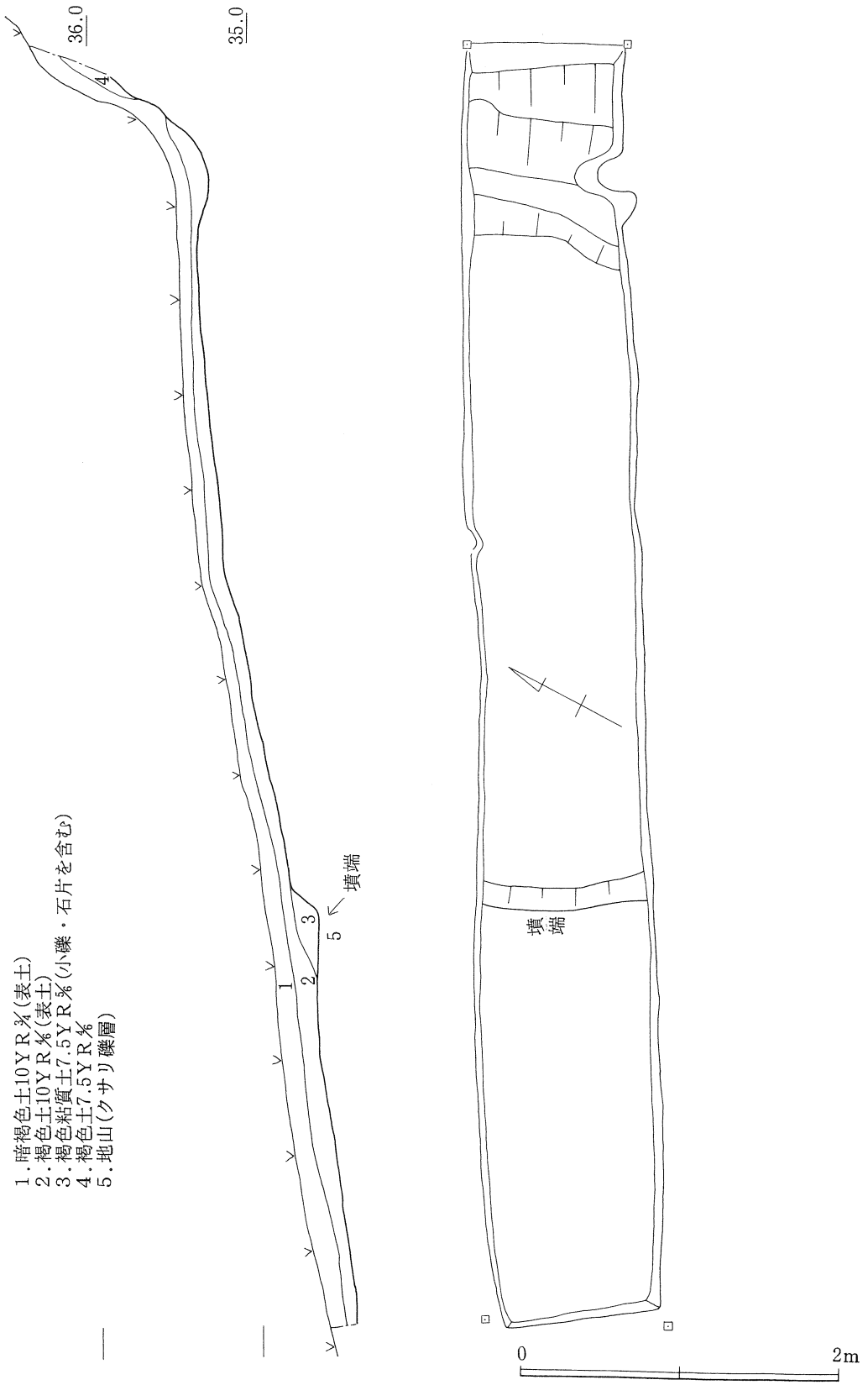
W－２トレンチ（第５図）

W－１トレンチで見られた墳裾と推定される立ち上がりがどのように続いているのかを確認するため、W－１トレンチから南方約９ｍの位置に設置した、長さ７ｍ、幅１ｍのトレンチである。

調査の結果、見かけの墳裾（石垣）より約3.5ｍ西方の位置に、W－１トレンチで検出されたものと同様の墳裾と推定される立ち上がりが検出された。この立ち上がりはトレンチ北壁寄りでは多少攪乱を受けているが、全体として現存高は約30cmあり、傾斜角約45°で、下端部のレベルはトレンチのほぼ中央で34.80ｍである。トレンチ内で地山面から検出された石はトレンチ西端付近の10cm大のものが１つあるのみで、W－１トレンチと同様、ここでも本来の葺石は完全に失われている。

トレンチ東端の南北に走る浅い溝は、W－１トレンチで見られたものと同じく墳丘削平時以降のものであり、トレンチ西端の不規則な溝も、土層断面から見て後世のものであって、古墳と直接関連するものではない。トレンチ西端の溝からは地山面よりやや浮いた位置で鉄器の小片が出土している。鉄器の形態は小片のため復元できないが、その腐食状態から見ても古墳に伴うような古い時期のものでないと判断される。

今回のW－１トレンチ及びW－２トレンチの調査によって、本来の古墳の西側墳端は現在の見か



第４図　Ｗ－１トレンチ実測図（１／40）

けの墳裾より大幅に広がることが判明した。葺石については明確に確認することはできなかったが、1991年に行われた北側墳裾の調査や今回並行して実施した南側墳裾の調査では葺石の存在が確認されており、西側墳丘斜面にも本来は葺石があったものと思われる。　　（藤永照隆）

Sトレンチ（第６図）

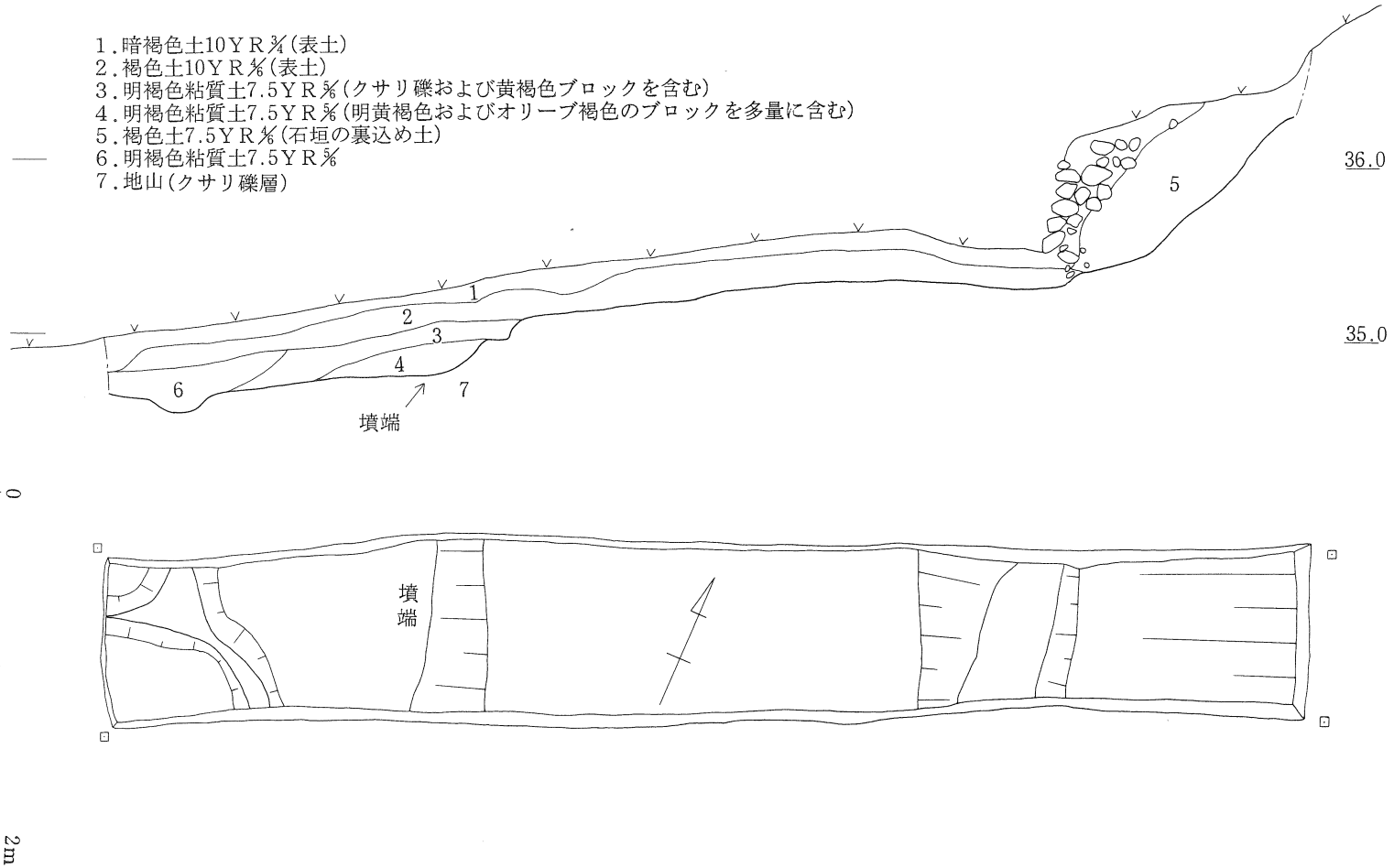
墳丘南側は後世の開墾により原形をとどめておらず、現在竹林となっている。そのためトレンチは竹の植生の稀少な場所を選び、幅１m、長さ10mのものを１本、現状の墳丘カット面（石垣になっている）直下から南側へ向けて設定し、墳端と丘陵切断部の確認のための調査を行った。

表土である第１層は墳丘を削った土をならした盛り土層と考えられ、20～30cmの厚さで堆積していた。トレンチ北端では石垣を作るための溝がこの層に掘り込まれている。第２層もある時期の表土と考えられ、上面付近から近世後半以降の肥前系の陶磁器破片(1)やビー玉などが出土している。この層を除去すると、トレンチ南寄りでは地表から深さ40～50cm程度のところで平坦な地山（クサリ礫層）の面が検出された。開墾による削平面と考えられる。一方、トレンチ北側では第４層の下、地表から深さ約60cmのところでテラス状の地山面が検出された。この面は、1991年の調査の際にこのトレンチの西方約4.5mの所で確認された排水溝出口と考えられる遺構の面と、レベルがほぼ一致している。

しかし、トレンチ中央部では地山が出ないのでさらに掘り進めたところ、地表から深さ80cm前後のところから人頭大ぐらいの石が累々と現れた。石は角礫ないし亜角礫で、南北1.8～2mほどの範囲にぎっしりと詰まり、石の検出面は墳丘側が高く南側が低い状態であった。この石群の性格を調べるため幅50cmのサブトレンチを設定して掘り下げた結果、ほとんどの石は極暗褐色の流土中に含まれていて、原位置のものはなく、おそらく葺石に使われていた石が北から南に流れ込む形で二次的に堆積したものであることが分かった。そこで石を除去してさらに発掘を進めたところ、その下方に地山を掘り込んで作った東西方向に走る大きな溝状の遺構があることが判明した。

こうして検出された溝は、幅1.2～1.4mの平坦な底面をもつ断面逆台形の見事なもので、北側つまり墳丘側は傾斜が25°内外に、南側つまり外側は30°前後に地山を掘り込み、両側とも底近くは傾斜をきつくして作っている。溝底のレベルはちょうど標高37mぐらいで、墳丘側の地山面からの深さは80cm余り、現地表面からの深さは1.4～1.5mである。溝の幅は現状で4.1～4.2mあるが、既述のように南側の地山面は後世の削平を受けているので、本来は現状よりずっと大きくかつ深かったと考えられる。

溝底には３～10cm程度の小円礫（玉砂利）が多数検出された。円礫は特にトレンチの東側で密集していた。溝の底に砂利を撒いていたのか、あるいは東に砂利を用いた遺構があるのか　もしくは



第5図　W－2トレンチ実測図（1／40）

また別の可能性を考えるのか、確言はできないが興味ある発見である。発掘時の所見から、溝の両斜面には葺石のような施設は一切なかったと考えてよい。それでは、溝の覆土中に多量に含まれていた石は本来どこにあったものなのだろうか。

溝の北側つまり墳丘側は標高37.8ないし37.9mのテラスとなっているが、トレンチの北端部には地山に及ぶ削平があって、本来の墳丘の姿は分からなくなっている。それでも、北端近くに地山面のわずかな立ち上がりが認められ、そのすぐ南の地山面には不整形な浅い溝状の窪みがあって、小礫・石片を含む粘質土が入っていた（第６図の第10層）。こうしたことから、トレンチ北端あたりに本来の墳丘の立ち上がりがあって、そのすぐ手前の浅い溝状のものは葺石根石の抜き取り痕ではないかと推定された。つまり、前述の深い溝の北即ち墳丘側には幅約1.5mのテラスが作られていて、その内側から、石を葺いた墳丘斜面が始まっていたのではないかと考えられるのである。

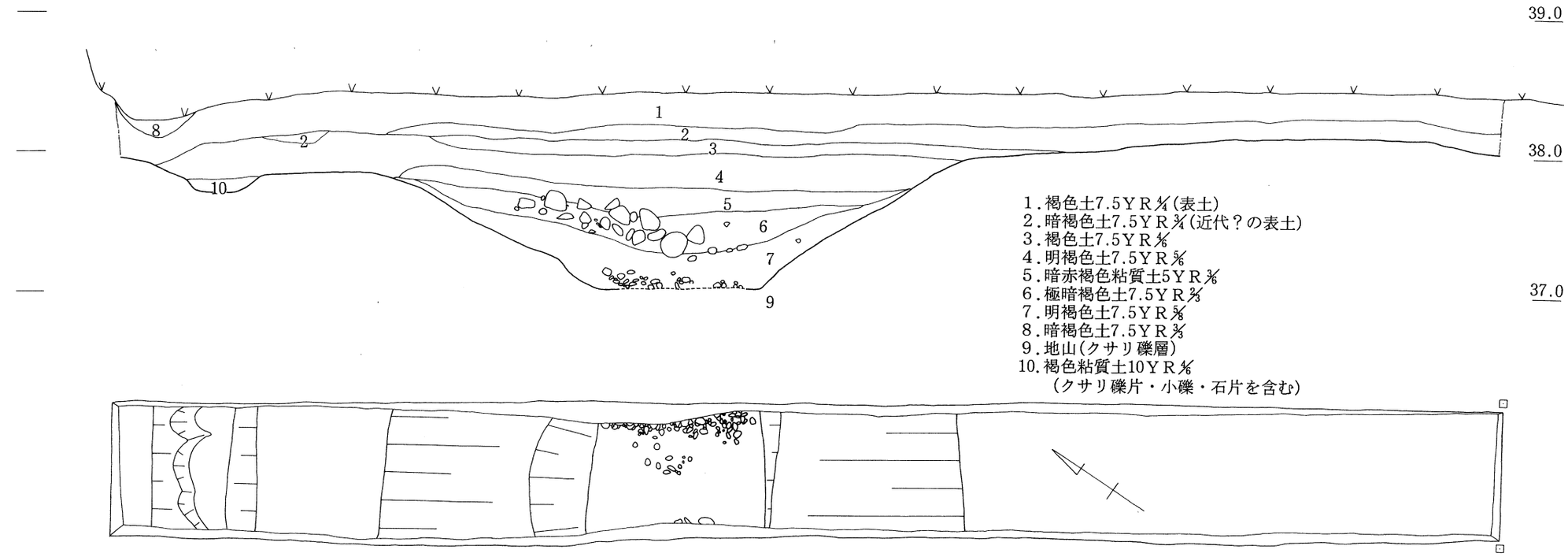
以上のことを総合すると、Ｓトレンチの土層の堆積は大筋で次のように理解することができる。

古墳築造時には第７図のような状態であったが、溝に第７層がたまった頃に葺石の崩落が始まり、第６層そして第５層が崩落した葺石とともに流入して、その部分が腐植によって黒色化した時期があった。葺石の崩落は、自然によるものか人為的なものかは不明である。その際、溝の内側のテラス面が多少削られるようなことがあったかも知れない。第４層・第３層が堆積し、その後、開墾による削平が行われて第２層が表土だった時代があった。その上面に近世後半以降の陶磁器片などが捨てられた後、最後に第１層が盛られたが、その前後に、トレンチ北端付近が地山まで削られたのである。

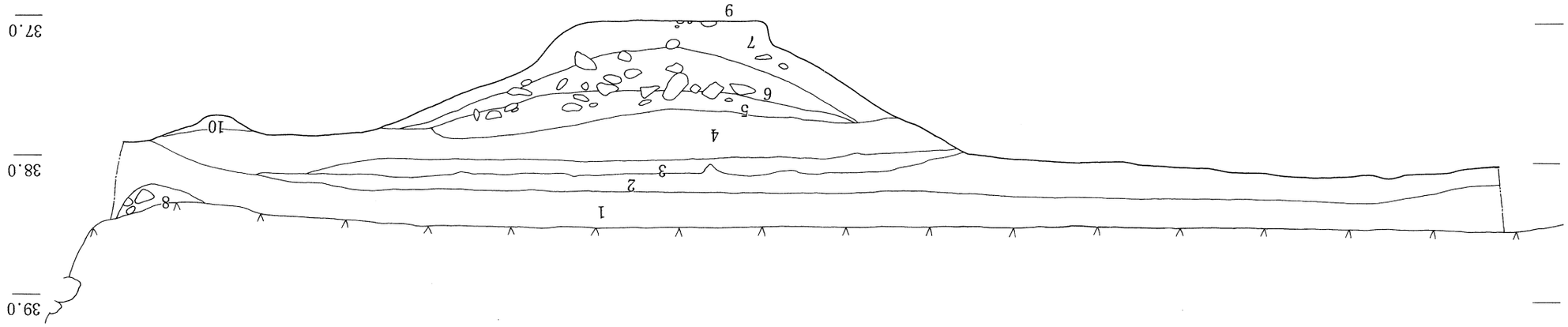
なお、1991年の調査で検出した排水溝の出口と考えられる遺構（位置は第３図参照）は、溝の内側にあるテラスの上に作られていたことが明らかになった。つまり、石室床下から導かれた水は、このテラスの上に出てくるようになっていたのである。　　（櫛山範一・渡辺貞幸）

---

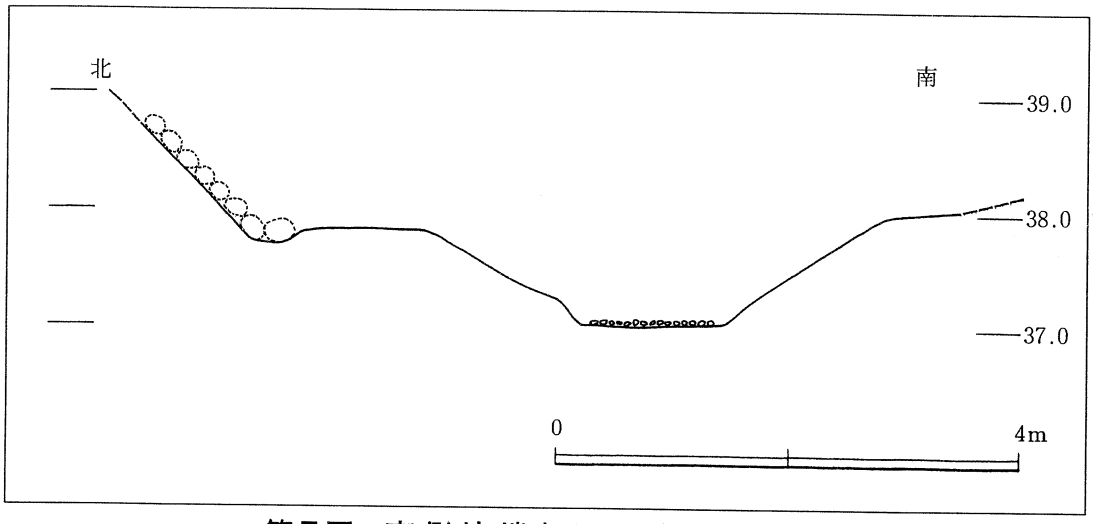
(1) 出土した陶磁器類については、島根県埋蔵文化財調査センター西尾克己氏のご教示を得た。



1．褐色土7.5ＹＲ4/4(表土)
2．暗褐色土7.5ＹＲ3/4(近代？の表土)
3．褐色土7.5ＹＲ4/6
4．明褐色土7.5ＹＲ5/6
5．暗赤褐色粘質土5ＹＲ3/6
6．極暗褐色土7.5ＹＲ2/3
7．明褐色土7.5ＹＲ5/8
8．暗褐色土7.5ＹＲ3/3
9．地山(クサリ礫層)
10．褐色粘質土10ＹＲ4/6
（クサリ礫片・小礫・石片を含む）



第６図　Ｓトレンチ実測図（1／40）



第7図　南側墳端部断面復元想像図

6　まとめと若干の考察

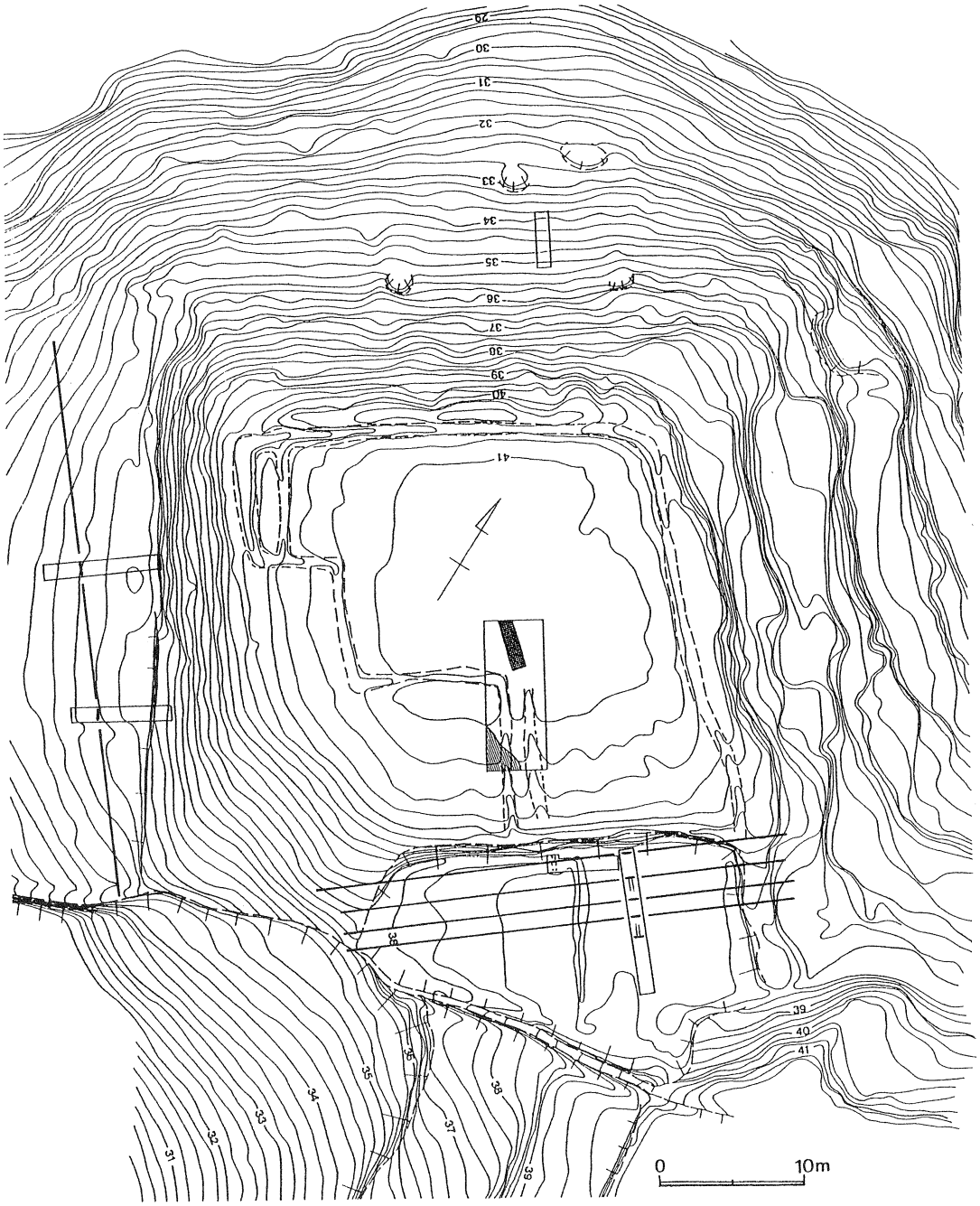
(1)

今回の調査はきわめて限定された発掘調査ではあったが、墳丘の西側と南側に設けた発掘区のそれぞれで、墳丘端部ないしその可能性の強い遺構を検出することができた。これらは、大成古墳の本来の姿を復元する上で重要な成果であったと言える。

まず、墳丘西辺では、現状の墳丘裾（石垣の築かれた所）の外側つまり西側で、耕作土の下にある地山の立ち上がりが検出された。この立ち上がりは、その位置や方向から見て耕作などによるものとは思われず、辛うじて開墾による削平を免れた古墳の墳端部分であった可能性が強いと判断された。W－1とW－2の各トレンチで確認されたこの立ち上がり下端を結んだ線を古墳西辺の墳端ラインとした場合、どのようなことが考えられるか、以下に検討してみたい。

このラインは座標系（第Ⅲ系）の方眼北に対しおよそN39°Wの方向を示す（第8図）。これは現況の墳裾（石垣）ラインの方向とは約10°もずれているので、現状の墳形から受ける印象とは大きな差違があるし、墳丘西側は特に北寄りにおいて大幅な後世の削平を想定することになる。しかし、このラインは現状の墳頂平坦面の西縁ラインとはほぼ同じ方向になる。そして何よりも興味深いのは、この方向が、1991年の調査で再発掘された竪穴式石室の主軸方向とかなり近いという事実である[1]。前回の調査時には、現状から推定された墳丘の軸と石室の主軸とが甚だしくずれていることが注意され、問題点の一つとなっていたのであるが、西側の墳端を前記のように推定し直すと、そのずれは5°前後（頭位が西に振れる）まで縮まるのである。

荒島丘陵の前期の方墳で見ると、古墳の推定中軸線と石室の主軸の方向とは必ずしも一致してい



第８図　墳端の推定ライン（ベースマップ、方位については第３図に同じ）

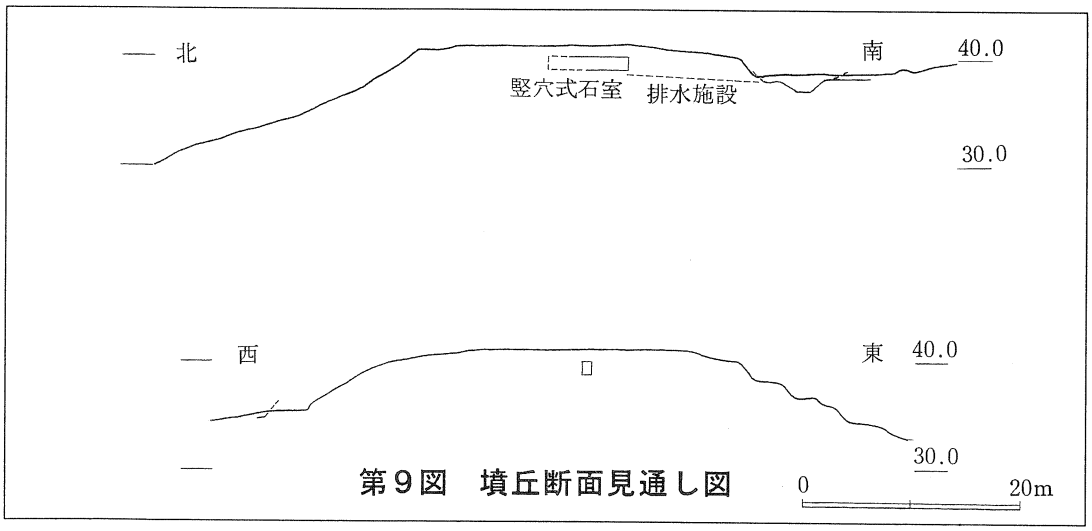
ない。造山１号墳では、比較的旧状をとどめていると見られる墳丘北西と南西の等高線の流れを基準にして墳丘中軸を復元すると、近年まで開口していた第１石室の中軸線はおよそ５°ぐらい頭位が東に振れている(2)。造山３号墳の場合では、墳丘北北西側の等高線を基準に復元した墳丘中軸線に対し、石室主軸方向は頭位が約５°西に振れている(3)。いずれも墳丘の現状観察のみからの検討なので不正確さは免れないが、理由はともかく５°前後のずれはよくあるのだということが確認できれば、大成古墳の西側の墳端を前記したように考えても何等の不都合はないことが分かるであろう。

検討されるべき問題点としては次の諸点が挙げられる。一つは、この西縁ラインを直角に振ったラインが、比較的遺存状況が良好と予想されている北側斜面の等高線の方向と一致しないことである。但し、そのずれは大きなものではなく（５°前後）、また、北側の墳端についてははっきりしたことは分かっていないのに加えて、もともとこの古墳が、コーナーが直角をなす正確な方形墳として造成されたかどうかも分からないので、あまり問題視する必要はないかも知れない。

もう一つの点は、古墳の東西方向の規模に関することである。1991年再発掘の、つまり1911年発掘の石室が本古墳の唯一の、もしくは中心の埋葬施設であると仮定した場合、石室は墳丘の中央に作られている蓋然性が大きいとすれば、復元される墳丘の東西方向の大きさは58m前後となり、造山１号墳と並ぶきわめて壮大な古墳であったことになるのである。古墳の東辺は甚大な破壊を受けていると考える必要があるだろう。しかしながらこの問題も仮定の上に立った議論であり、これ以上の詮索は無意味なので、ここでは、大成古墳の東西長が60m近くあったという可能性を記しておくにとどめたい。古墳の高さは、西辺墳端から現状の墳頂までで約6.5mである。

（２）

南側のトレンチでの所見とそれから推定される墳丘南端部の本来の姿についてはすでに詳述した。



第９図　墳丘断面見通し図

即ち、自然丘陵を切断して古墳の南端を画する断面逆台形の大きな溝が作られ、その内側に幅1.5mぐらいのテラスがあって、さらにその内側に葺石を備えた墳丘斜面があった、と考えられるのである。溝の斜面には葺石は施されておらず――従って、ここは墳端と言うより「区画溝」と呼んだ方がふさわしいが――、底面には多数の玉砂利が認められた。この砂利の性格については、溝底全面に敷いたもの、局部的に撒いたもの、近くに砂利を用いた遺構がある、等々が考えられ、結論は将来の全面調査に委ねざるを得ない。区画溝は、地形から見て、また、溝底のレベルから見ても、古墳南辺だけにあったと考えられるが、その東西端がどのように処理されているかも今後の調査課題である。

Sトレンチの所見では、葺石を備えた墳丘は、区画溝内側のテラスのさらに内側から始まっていた。この墳端のレベルは37.8～37.9mで、現状の墳頂との比高約3.4m、西側のトレンチで検出した墳端のレベル（34.7～34.8m）と比べると３m余り高い。墳丘北辺での墳端については、1991年の調査では明確なことは分からなかったが、現地形の傾斜変換点辺りを境にしてその上方で葺石がよく遺存していた。その葺石下端部のレベルは34.5mぐらいであったから、多少の誤差を見込んでも西辺の墳端レベルとそれほどの高低差はない。従って、古墳の北辺から西辺にかけては、葺石をもつ一続きの墳端がめぐっていたものと想像される。しかし、西辺と南辺は墳端レベルが大きく違うので、その境をどのように造成したかが問題となる。

大成古墳と非常によく似た立地をしているのが造山１号墳である。造山１号墳も、丘陵の最高所でなく西に派生した丘陵の肩部に造られている。墳丘の調査は行われておらず、現地観察と測量図からの検討にならざるを得ないが、この古墳は平野側つまり北西方向から望むと左右約60m、高さ10m以上もある大方墳に見える。しかし、北西側の墳裾推定部とその反対側である南東墳裾の標高差は、現地形で約７mもあり、当然のことながら墳丘の下段は全周せず、丘陵との切り離し部である南東側では、墳丘上段だけが造成されている。要するに、全周しているのは１辺約40mの墳丘上段の部分だけで、下の段は丘陵の低い側に造成された言わば基壇なのである。従って、墳丘南東側の両端部分がどのような造りになっていたのか、つまり下段の葺石の端部がどのように処理されていたのかは大変興味深いものがある。時代は全く違うが、終末期の方墳に類似した造りのものがある[4]ことも注意される。なお、このような古墳の墳丘規模を表す場合、それがどこで計測した数値なのかはっきりさせておく必要がある。造山１号墳では、正方形の方墳を意識して造られているにもかかわらず古墳として造成工事がなされたのはおよそ60m×50mの長方形の範囲であり、実際の方墳部分の規模は１辺約40m、高さは４～５mということになる。

さて、以上のように推定される造山１号墳の構造は、大成古墳の本来の姿を考える上で大いに参考になろう。大成古墳は段築の痕跡が確認されていない（この点も今後の重要な調査課題である）

が、おそらくは造山１号墳と同様な造りになっていた可能性が強い。つまり、Ｓトレンチで検出された葺石をもつ墳端は古墳の上の段（石室の位置から考えて１辺30数ｍとなろうか）として全周し、西・北・東の斜面には、その下に葺石を備えた下の段が造成されていたのではなかろうか。

大成古墳は墳丘北側の墳端がきちんと把握されていないので、古墳造成の南北規模を確定することはできない。とりあえず1991年の調査で検出された北側葺石下端部辺りを基準にした数値を示せば、南の区画溝の墳丘側下端までで約44ｍ、葺石をもつ墳端まではおよそ41ｍということになる。

（３）

大成古墳は出雲地方の代表的大型前期古墳の一つとして、その出土品とともによく知られた存在である。しかしそれにもかかわらず、古墳そのものについてのデータは驚くほど少なかった。これは取りも直さず、出雲の古墳時代前期像に不透明な部分を残す一因でもあった。1991年に東京国立博物館の手によって考古学的調査が始められたことは、古墳にとっても、また、当地域の古墳時代研究にとっても、画期的な意味をもっていたと言えよう。言うまでもなく今回の調査は、その調査成果を引き継ぐ形で実施されたものである。

調査の結果、大成古墳はこれまで考えられていた以上の規模をもつ古墳であった可能性が強まった。そして、同じ荒島丘陵にある造山１号墳と多くの点で共通していることが推定された。両古墳は、ともに三角縁神獣鏡を副葬する竪穴式石室をもつことから時期的にも近接した古墳であると考えられてきたが、それだけでなく、立地がそっくり同じで、推定される墳丘規模も近いのである。

しかし、大成古墳の重要性を考えれば、これまで明らかにできたことは余りにも不十分であって、たびたび記してきたように、墳丘の問題に限っても今後に残された課題は多い。さらに、石室については一部しか明らかになっておらず、石室の構築法などについては何も分かっていない。大成古墳が出雲の、ひいては日本の古墳時代史の中で正当な位置を占めるためには、さらに継続した調査が必要である。

（渡辺貞幸）

---

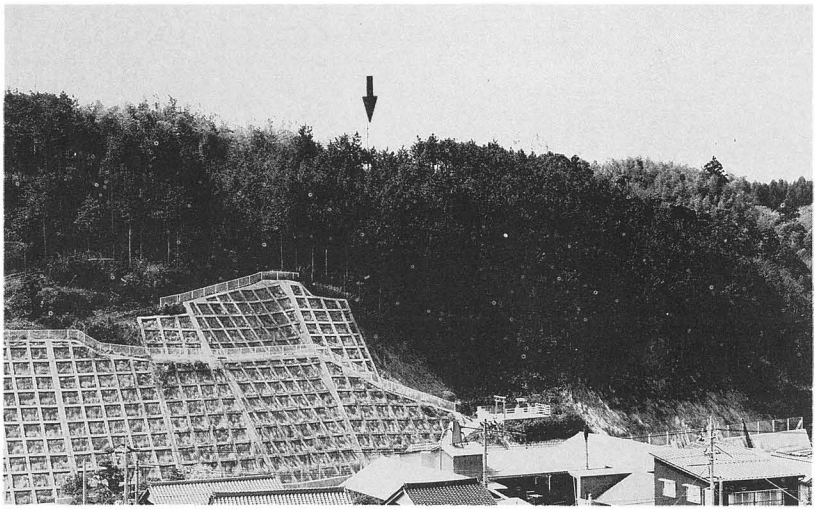
(1) 第８図のベースマップである本村豪章ほか『既掘前期古墳資料の綜合的再検討』（1992）所載の第２図は石室の位置がやや不正確なので、ここでは調査時の原図によって検討した。

(2) 安来市教育委員会作成の墳丘測量図と出雲考古学研究会『荒島墳墓群』（1985）所載の石室実測図をもとに、座標系方眼と磁北の差違を考慮して計測した。

(3) 山本清『造山第三号墳調査報告』（1967）の図版第三および第一一による。

(4) 北房町教育委員会『岡山県指定史跡大谷１号墳』（1989）

【図　版　1】



大成古墳遠景（矢印）
（北東から）

西側墳裾調査前
（南から）

西側墳裾トレンチ
完掘状況
（西から）

【図　版　2】

W－１トレンチ　完掘状況
（西から）

W－１トレンチ
墳端検出状況
（南西から）

【図　版　3】

W－2トレンチ　完掘状況
（西から）

W－2トレンチ
墳端検出状況
（南西から）

【図　版　4】

南側墳裾調査前
（南から）

Ｓトレンチ完掘状況
（南から）

Ｓトレンチ北端部
（南西から）

【図　版　5】

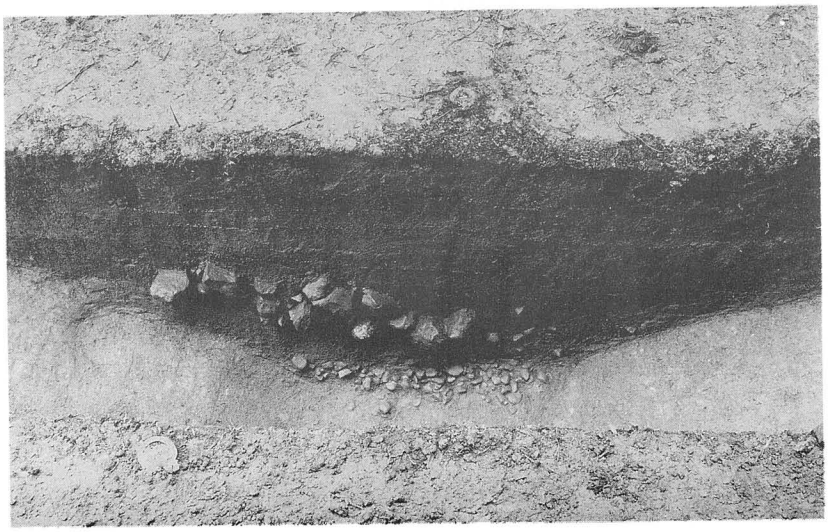
Ｓトレンチ　崩落葺石検出状況
（南から）

Ｓトレンチ　区画溝検出状況
（南から）

【図　版　6】

Sトレンチ断面
（東から）

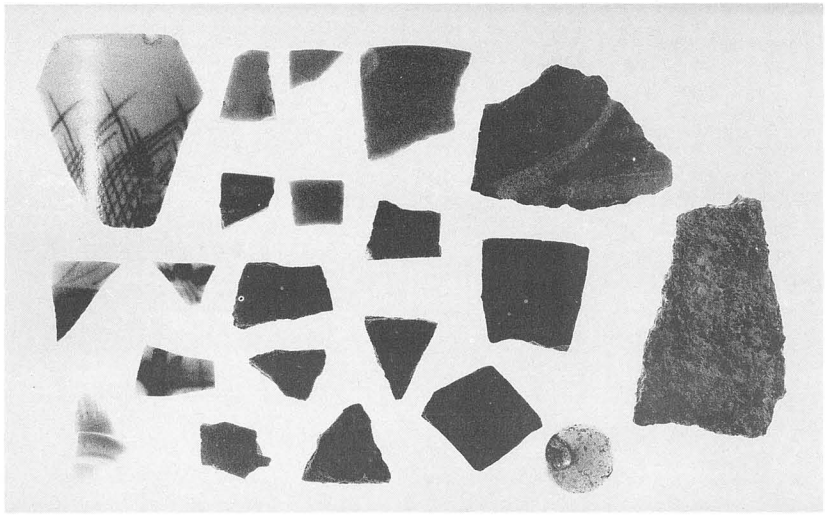
Sトレンチ区画溝底部
（東から）



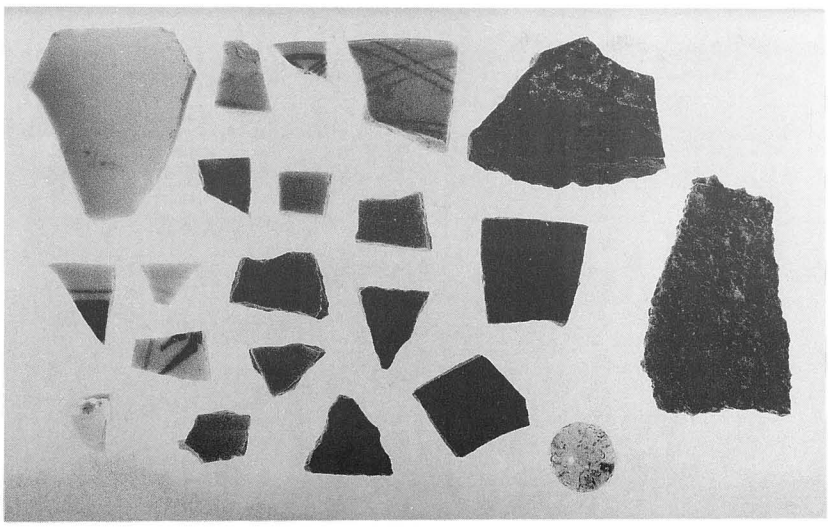
Sトレンチ断面
（西から）

【図　版　7】

Sトレンチ区画溝底部
（西から）



出　土　遺　物
（右端のみW－2トレンチ
他はSトレンチ）
左上の磁器片の長さ
4.9㎝



出　土　遺　物
（同上裏面）

平成７年３月31日印刷

大成古墳第３次発掘調査報告書

発行　安来市教育委員会

安来市安来町８７４－２

印刷　㈲松浦印刷

安来市飯梨町５７４－４